

第5分科会

各務原市立那加第三小学校



所在地 〒504-0022 各務原市那加東亜町1-1
校長 佐藤 元信
児童数 465名(19学級)
連絡先 TEL 058-383-0434 FAX 058-371-8103
E-mail naka3sho@he.mirai.ne.jp
URL <http://www.mirai.ne.jp/~naka3sho/>

【研究主題】

できる喜びを味わい、力いっぱい運動する子



1 研究の概要

(1) 研究主題

体育科における今日的な課題として、子供たちの体力低下や、運動する子とそうでない子の二極化傾向が挙げられる。このような課題に対して、学習指導要領では、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を培う観点から、指導内容の明確化及び運動の系統性が図られた。児童の発達の段階を踏まえ指導内容の明確化を図り、系統性を図って指導方法を改善していくことで、基本的な身体能力を身に付け、運動を豊かに実践していくための基礎を身に付けていくことができる。

本校では、体育科教育の本質を「確かな動きを身に付けること＝できること」としてとらえ、実践研究に励んできた。

児童の発達の段階に合わせ、系統的な指導を行うことや、児童が運動の見方を確かなものにし、仲間と互いに援助し合いながら力いっぱい練習に取り組むことで確かな動きを身に付け、さらに意欲的に学ぶ児童が育成されていく。

「できるようにになりたい」という子供たちの願いをかなえ、仲間と共に力いっぱい運動する子供の育成を目指し、本研究主題を設定した。

(2) 研究仮説

系統的な指導を充実させ、子供たち一人一人が、自分の目指す動きが分かり、仲間と共に見通しをもった課題追求をすれば、できる喜びを味わい、力いっぱい運動に取り組むことができる。

(3) 研究内容

- ① 全ての児童に運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発
 - ア 陸上運動（走り高跳び）における練習の場の設定の工夫
 - イ ゴール型ゲームにおける教材の開発（タグラグビーを簡易化したゲーム）
- ② 技能向上に結び付く思考・判断を高める工夫
 - ア 走り高跳びの姿を見る目を育てる課題提示の工夫及び課題追求での指導・援助
 - イ ゲームの様相を高めるための課題提示の工夫及び課題追求での指導・援助
- ③ 教師や学習者相互による適切な評価
 - ア 走り高跳びにおける練習の場に応じた相互評価の工夫
 - イ ゲームにおける相互援助活動（相互評価）の具体化

2 公開授業

(1) 第5学年 陸上運動「走り高跳び」 授業者： 鵜飼 朋子 教諭

「5～7歩のリズミカルな助走から力強く踏み切り、振り上げ足を上げて高く跳ぼう」の学習課題に向かい、前半練習は3人組となって、個々の課題を追求しながら繰り返し練習に取り組んだ。

練習の場として、バーの硬さや高さを克服するためにゴムバーを設置したり、助走のリズムや踏み切り位置を確かめるためのケンステップを助走路に置いたりした。それ以外にも、跳び越すことができない姿に応じて、その原因と克服するための練習方法を例示し、一人一人が選択できるようにした。

後半練習はグループで互いの試技を見合い、結果を伝え合いながら、選択した練習方法が適

しているかどうか、次にどんな練習が必要か助言し合った。

教師は、スモールステップでの技能の上達を認め、さらに技能向上のための助言を行った。本時では、「振り上げ足が引かかってしまうのはなぜだと思う？」などと問いかけ、踏み切り位置を修正したり、振り上げ足のスピードを意識させたりすることができた。

記録会では、練習の成果を発揮し、これまでの記録を更新して喜ぶ児童の周りに集まり、グループの仲間も互いの努力を認め合うことができた。



(2) 第4学年 ゴール型ゲーム「タグラグビー（簡易化したゲーム）」

授業者： 五藤 祐子 教諭



タグラグビーを簡易にしたゲームを教材化し、「パスのもらいやすいところに動いてパスをもらい、トライするゲームをしよう」という学習課題で、子供たちはグループの作戦を考えゲームに臨んだ。

課題提示では、教師はグループの作戦の動きをシミュレーションして、「どこへ動いたらパスがもらえるか考えよう。」と問いかけ、味方がボールを持ったとき、どこへ動くと次の動きにつながっていくか考えさせた。タグを取られることよりも、取られた後にボールをつなぐことを意識させることで、パスがつながりスピーディーなゲームが多く見られるようになった。

運動の見方を高めるために、ゲーム中のプレーヤーやサイドコーチに、「今、いいところでパスをもらえたね。どんなところでもらったの？」と問いかけて、思考を顕在化させた。

3 研究協議

(1) 提案

司会者： 河田 尚史 教諭

発表者： 臼井 一彦 教頭（岐阜県小学校体育研究会）

<本校の主張・提案>

① 全ての児童に運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発

- ・ 指導内容の系統化を図り、身に付ける動きを明確にして練習の場の設定や教材の開発をする。

② 技能向上に結び付く思考・判断を高める工夫

- ・ 比較を通して、目指す動きと自分の動きの違いに気づき、課題を明らかにする。
- ・ できた要因、できない要因を明らかにするための問いかけを工夫する。

③ 教師や学習者相互による適切な評価

- ・ 評価の場及び評価方法を工夫する。

<本校の実践>

① 5年 陸上運動「走り高跳び」

② 4年 ゲーム（ゴール型ゲーム）「タグラグビー（簡易化したゲーム）」



(2) 協議内容 (□…質問・意見・感想)

※ 回答は、授業者(鵜飼教諭, 五藤教諭)

及び(御宿主幹教諭 岐阜県小学校体育研究会)

- 走り高跳びでは、多様な練習の場があり素晴らしい。(ケンステップに)足を入れることに意識がいつてしまい、強い踏み切りができないのではないか。助走・踏み切り・空中姿勢・着地と連動した動きのための工夫はないか。
 - A 後半練習で、一連の動きを練習する際に自分の課題ができていたか確かめている。
 - A 「イチ、ニ、イチ、ニ、サンッ」の練習は、部分の練習である。多様な練習の場をつなげ、高跳びの運動全体を練習する場に戻ったときにもリズムで追っていく。
- タグラグビーで、ボールを持っていない子への指導の一つとして、ディフェンスの指導は考えていないのか。
 - A オフェンスを中心に単元を仕組んでいる。守りについての課題は、特に設定していない。
- 子供たち同士が声をかけ合ったり励まし合ったりする姿が素晴らしい。これまでの授業の中でどのような指導をしてきたのか。
 - A 学級目標の中にある「協力」と合わせて、教師からの声掛けが広まってきた。
 - A 「どんな声をかけることができそう？」と問いかけ、つぶやきを拾ってきた。ゲーム中の言葉をその場で価値付け、学級全員に広めてきた。
- 体育の学習グループはどのように編制しているのか。
 - A グループ間等質、グループ内異質になるよう、普段の様子や走力、経験の有無などから教師が編制した。
 - A グループを高めていくために係を決めている。グループとして成立するようにして、集団の質の高まりにつなげている。
- タグラグビーでは、単元の流れや課題作りは子供の意見から作っているのか。
 - A ゲームの様相を予想して考えているが、試しのゲームの後、うまくできたことやできなかったことを子供たちが振り返り、それを基に課題を考えていく。
- 個人の動きやグループの作戦はどのように生み出されていくのか。
 - A 3年生のときのゲームの経験が生きている。フェイントやチェンジオブペースは子供から出てきた。トライにつながる動きを価値付け、掲示で残している。
 - A 動きの高まりは、低学年からの系統性を大切にしてきた結果である。特に低学年では、1対1の動きを大切にしている。
- タグラグビーの4年生は第4時としてはとてもうまい。3年生までの運動が生きている。グループの話合い活動では、聞く側の子を活性化したい。一人一人の考えをしっかりとらせたせ、じっくりノートに書く活動を入れてはどうか。走り高跳びの青グループの子は、自信をもっていなかった。跳べない高さで練習していた。もっと下げてもよかったのではないか。個人の目標はどのように設定したのか。
 - A 子供一人一人が走力などから個々で目標を決めていた。1cmでもよい。チャレンジする気持ちを大切にしている。紫グループの男児は、5cm刻みにこだわって練習していた。
- 走り高跳びの青グループの子供は、反省会で跳べない理由が分かった。初めリズムが合わなかったのが、ケンパーでリズムをつかんだ。スピードが上がって、助走距離も伸びていった。跳ばずに、振り上げ足だけの練習もしていた。満足そうに授業を終えていた。白グループの子供は、抜き足の動きがすばらしい。仲間への助言も的確だった。跳び終えた

後にハイタッチをしていた姿から、相互援助活動が生きていると感じた。

- 日頃の学習規律がすべて出ていると思う。素直に喜んだり悔しがったりする反応や発表の仕方もすばらしい。めあてに絡めて感想を言うことができる。2つの公開授業の流れが同じなのはどうか。
 - A 岐阜県として、小学校体育の学習過程はほぼ同じである。「全体会・グループ会・前半練習・中間研究会・後半練習・記録会・グループ反省会・全体会」という流れである。学年の発達の段階や種目に応じて変える部分もある。
- タグラグビーを初めて見た。とても面白い教材なので一度やってみたいと思う。走り高跳びの青グループの子供は、あの高さのままで挑戦してほしかった。走り高跳びで、助走のマークを使っている子供がいた。使い方についてどのような指導をしていたのか。
 - A グループのかごの中に、一人一人のマークが用意しており、必要な子供が使っている。
- 走り高跳びの前半練習は、それぞれが課題をもって練習の場を移動していたが、ほぼ均等に分かれていた。どのような指導があったのか。また、後半練習を入れた意図は。
 - A まず初めに、学習カードに書いた自己の課題を練習する場へ移動する。それをクリアできたら次の課題へ挑戦していく。付箋を使って可視化している。子供たちは、空いている場所を見つけて、自己の課題に挑戦していつている。前半練習は、グループを半分に分けて行い、後半練習はグループ全員で見合っている。グループ得点を上げていく機会をもつために行っている。
- タグラグビーのルールは、どのように決まっていたのか。変遷を教えてください。
 - A 教師が決めたものもあり、子供たちと一緒に決めていったものもある。「パスカットなし」は教師が決めたものである。

(3) 指導講評 指導助言 : 岐阜聖徳学園大学准教授 佐藤 善人 先生
研究討議の内容をまとめてみると、次のようになる。

- ◎ ケンステップは、踏み切り足を決めるために効果を発揮する。
- ◎ 自分にとって必要な場を選択する力を付けることが大切である。
- ◎ タグラグビーのオフェンスが上手になってきているので、相乗効果でディフェンスもうまくなっていくと考える。
- ◎ グループ編制は、グループ間等質になるよう配慮する。
- ◎ 学習課題について、計画はきちんと立てる必要があるが、実態に合わせて柔軟に変更することが大切である。
- ◎ 細かい動きについて、子供たちから出てくることはあるが、指導者として教えたことはきちんと教えていくことが大切である。
- ◎ 言語活動の充実と言われるが、話合い自体が目的ではなく、話合いをすることによって、運動がおもしろくなるとか、うまくなっていくことが大切である。そのために一人一人が考えをもつことや教師が必要な情報を提供することが大切である。発言しない場合でも、学級担任と子供の関係で引き出したり、書かせたりすることが重要である。
- ◎ 走り高跳びでは、低い高さで繰り返し練習することも重要である。
- ◎ 「記録が伸びなかったけど、原因が分かった」と言える子供を育てたい。できなくても面白いことは結構あり、できないからこそやってみようとする。そして、できたときの喜びや楽しさがある。できないことも楽しいという発想も必要である。
- ◎ 学習過程については、これまでの岐阜県の財産ですばらしい。しかし、子供の実態に応じて、「今日はゲームから入ろう」ということもある。

- ◎ タグラグビーのルールの工夫においては、ゲームの面白さが損なわれないことが大切である。タグラグビーで外せないのは「前へ投げてはいけない」ということである。ボールを境にしてオフェンスとディフェンスが分かれているところが、このゲームのよいところである。

次に、那加第三小学校の授業に、昨年から関わってきて感じたことを述べる。

- ◎ オリンピック選手のようなトップアスリート、学校体育、運動部活動、生涯スポーツのどのシーンでもスポーツは生活を豊かにしてくれる。
- ◎ スポーツがなくても生きていけるが、スポーツがないとつまらない。だからこそ今日の那加第三小学校のような体育の授業を全国の小学校でも導き出してもらいたい。

【研究内容1について】

- ◎ 走り高跳びの授業の場の工夫について、二重バーとゴムのバーの設定があった。ゴムのバーは引っかかるとすぐに外れるようになっている。倒れてこないように安全に配慮されている。
- ◎ 6カ所の練習の場が放射状に配置されている。全体を把握しやすいとともに、子供たちも安全に練習できる。
- ◎ タグラグビーでは、系統性を意識したゲームが行われている。子供たちが「易しい、面白い」と感じるゲームからタグラグビーに向かうように系統的に学習が展開されている。
- ◎ コートの広さも、試行錯誤の結果、子供の実態に合わせて設定されていること、タグを取る回数制限がないことなどの工夫がある。回数制限については、前述、ディフェンスの指導との関連から分岐点になってくると考えられる。

【研究内容2について】

- ◎ 思考判断するための環境を整えていくことが大切である。本日の授業では、掲示物にそれがあつた。作戦ボードや、スローで流れる映像などもそうである。子供たちは「あー、そういうことか」と考えて学習を展開することができる。
- ◎ 子供たちは作戦ボードなどをよく活用して話し合っていた。そこに教師が入って示唆を与えていくことも重要である。
- ◎ 走り高跳びでは、指導者は「何がよかったの？ どうしたらいいの？」と問いかけていた。子供は「踏み切りが強かったから」と自分で気付くことができる。その繰り返しが思考判断を高めていく。
- ◎ 一人一人がめあてをもって振り返ることや、教え合う姿がどちらの授業でも見られた。たいへんすばらしい姿である。

【研究内容3について】

- ◎ まず、具体的なめあてをもつための指導がないと、お互いに評価することはできない。できたことを「できたよ」と言うだけではいけない。みんなが共通理解をして、教え合えるような環境を整えていくことが大切である。
- ◎ 友達の運動のよさをできるだけ多く発言させる工夫がなされていた。
- ◎ 指導者が子供を大げさにほめて、フィードバックさせていた。教師が瞬時に子供のよさを認めていたので、子供たちもめあてに向かって学習を進めることができていた。

【個別指導とグループ学習のバランスについて】

- ◎ 個別学習を成立させるには、グループ学習が成立していることが必要である。
- ◎ 岐阜県が大切にしてきたグループ学習ができています。那加第三小学校の体育授業が目指すべき姿である。

【全体課題と個別課題について】

- ◎ タグラグビーでの全体課題は、「パスのもらいやすい位置に動いて」だった。全体課題と子供たちの実態が離れていることがよくあるが、今日の授業では合っていた。子供たちは「四角作戦」「かたまり作戦」などと、自分たちの動きに合わせてうまく作戦を考えていた。パスをつないでトライするんだということを理解していた。
- ◎ 最後に発言した子供は、「ボールの後ろを走ってパスをもらった」と言い、本時では、全体課題、グループ課題（作戦）、個人課題がつながっていた。
- ◎ 「トライを決められなかったけど、自分が求めていた動きができてうれしい。またやってみたい」と発言できる姿はすばらしい。めあてを達成しようとする姿である。

【体育授業のおもしろさについて】

- ◎ 運動好きになるきっかけの一つに、「仲間からの受容」があげられる。対人的交流が深まって運動が好きになっていく。
- ◎ 教師や仲間から認められ、ほめられる姿が、本日はたくさん見られた。
- ◎ マナーよくあいさつする姿、仲間とともに勝利を目指す姿、仲間が跳べるようになったことを喜び合う姿、どれもすばらしい姿である。
- ◎ 思考判断は大切だが、直接的な目的ではない。それだけを切り取って議論するべきではない。運動の面白さにふれるための手段として大きな意味があり、育成すべきである。
- ◎ 一生懸命、記録に挑戦する姿、ゲームで勝とうとする姿、「できた、わかった、もっとやってみたい、スポーツは面白い」と感じる姿が、今後の豊かなスポーツライフにつながっていくと考える。

4 成果と課題

(1) 成果

- 教材を系統的に指導するため、各学年で身に付けさせたい力をよく吟味して低学年から高学年まで見通した教材を開発し、指導計画を工夫するとともに、毎時間の課題提示を分かりやすく工夫したことにより、子供たちに目指す姿を明確にもたせることができた。
- 一人一人の課題に応じた練習の場を設定したり（陸上運動）、運動の全体や目指す動きをイメージさせるために動きをシミュレーションして提示したり（ゲーム、ボール運動）することによって、技能向上につながる思考・判断を高めていくことができた。
- 仲間の動きを見合ったときに伝え合う内容を明確にしたことにより、相互援助活動が具体的かつ活発になり、子供たちが相互評価を繰り返していくようになった。

(2) 課題

- ゲーム領域では、基底となる個人の技能の向上について、今後さらに具体的な目標をもたせたり、ゲームの様相が高まったことを評価できるような方法を考えたりしていきたい。
- 課題設定に当たって、個人種目では、個人が追求していく課題とグループの課題との関わりが曖昧なことがあった。集団種目では、ゲームの様相を高めるためのグループの作戦と個人の動きのめあてとの関わりが不十分なこともあった。今後も、できる喜びや運動の楽しさを味わわせることができるように、適切な課題設定となるよう、指導計画を吟味していく必要がある。
- 運動の見方を働かせた追求をさせていくためには、運動を見る目を今後も養っていく必要がある。